Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-12

The practice and evaluation of an educational program on the promotion of Japanese fathers' involvement in child rearing

上山, 直美

(Degree)
博士（保健学）

(Date of Degree)
2014-09-25

(Date of Publication)
2015-09-01

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第6247号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006247

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（様式３）

論文内容の要旨

専攻領域　国際保健学

専攻分野　国際保健協力活動

氏　　名　上山直美

論文題目（外国語の場合は，その和訳を（　）を付して併記すること。）

The practice and evaluation of an educational program on the promotion of Japanese fathers' involvement in child rearing
（日本の父親の育児参加を促す教育プログラムの実践と評価）

論文内容の要旨（1,000字～2,000字でまとめること。）

１．目的

父親を主体とした育児の世話技術を系統的に組み入れた教育プログラムの開発を行い、参加型の育児セミナーの中で教育プログラムを実施するとともに、プログラム開始前、6ヶ月後と1年後の3時点で教育プログラムの評価を行った。

２．研究方法

１）対象者

K市内に在住する未就学児の父親で教育プログラムに参加した父親19人（以下、プログラム参加群）と質問紙調査に参加した父親16人（以下、コントロール群）の合計35人を対象とし、2011年2月～2012年12月に実施した。

２）方法

（１）教育プログラムの開発と実施

複数の和文献検索データベース（1983～2009の時期）で父親、育児、育児参加、父親役割、性役割、親役割育児支援、子育て支援をキーワードとして検索し、対象者が未就学児の父親である116論文内容の分析を行った。父親の育児の捉え方、育児支援に関する課題やニーズとして①労働時間が長い、②育児に関わる時間が母親と比較して少ない、③育児の中で世話よりも遊びを好む、④育児、家事を行う上で性役割分担意識がある、⑤育児や家事に対してストレスや不安感、葛藤がある、⑥育児参加が妻や子どもにプラスの影響を与える、⑦地域社会において父親の育児モデルが少ない、⑧社会における父親像の変化、⑨多様なライフスタイルに合わせた育児支援の必要性があるという9項目を抽出した。これらのことから教育プログラムは父親の育児を助けるような育児技術を組み入れ、育児に対する意識と行動の変化を目標に設定した。内容は①子どもの生活に伴う世話、②子どもの食事についての知識、③子どもを含めた家族の食事、家族みんなで食べる場をつくる、④子どもとのコミュニケーション、しつけ、遊び、⑤子どもの発達、乳幼児に多い疾患、罹患時の世話を組み入れた。月1回のペースで6回実施し、6か月後にフォローアップを1回組み込んだ合計7回を教育プログラムとした。父親同士が知り合えるような地域主体で活動を行うという観点から、⑥父親同士のネットワークを構築する、⑦子育てに関する情報を提供する場とするという目標を付加した。評価は教育プログラム7回のうち3回以上参加群と2回以下参加群、コントロール群の3群間で行った。

（２）調査項目

教育プログラムの評価において、父親の成長や育児参加の継続性の検証を重要視した。調査内容は基本属性、育児への参加意識、育児に関する夫婦間での話し合い、父親同士の友人の有無、育児分担、育児の自立、及び使用した尺度は、ストレス測定尺度（岩田,1998)、父親になることによる発達尺度（森下,2006）である。

質問紙調査は、プログラム開始前、6ヶ月後（プログラム終了後)、1年後（フォローアップ終了後）の3時点で実施した。

形成的評価として、プログラム参加群に対して質問紙自由記載欄の6ヶ月後と1年後の質問紙の記載について分析を行った。

３．結果

育児に関する意識や行動の変化

（１)ストレス

3回以上参加群ではプログラム開始前の得点86.0±7.1と比較して1年後の得点79.8±6.8は有意に低かった($P<0.05$)。2回以下参加群ではプログラム開始前の得点79.3±5.9と比較して1年後の得点85.0±6.0が有意に高かった($P<0.01$)。コントロール群では6ヶ月後の得点85.8±7.7と比較して1年後の得点89.3±8.6は有意に高かった($P<0.05$)。

（２）父親の成長

3回以上参加群では、プログラム開始前の得点112.9±11.3と比較して、6ヶ月後 122.1±12.6は有意に高く($P<0.05$)、プログラム開始前の得点112.9±11.3と比較して1年後の得点 121.3±13.4は有意に高かった($P<0.05$)。2回以下参加群、コントロール群ではプログラム開始前、6ヶ月後、1年後の得点に変化はみられなかった。

（３）夫婦間の育児分担

3回以上参加群では、プログラム開始前の得点23.3±2.1と比べ6ヶ月後の得点25.8±3.4は有意に高く、また、プログラム開始前の得点23.3±2.1と比べて1年後の得点26.6±3.1は有意に高かった。

（４）育児の自立

3回以上参加群では、プログラム開始前の得点40.8±5.7と比べ6ヶ月後の得点44.5±3.7は有意に高く($P<0.05$)、また、6ヶ月後の得点44.5±3.7と比べて、1年後の得点46.4±3.2は有意に高かった($P<0.01$)。

４．結論

本研究では、育児の世話技術を系統的に組み入れた教育プログラムの開発を行った。その教育プログラムを参加型の育児セミナーで実施することにより、ストレスの緩和、父親になることによる発達、父親の育児分担割合の増加、父親の育児技術の自立が促された。このことから、本研究で開発した教育プログラムは父親の育児参加を高める可能性が示唆された。

指導教員氏名：松尾博哉教授

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	上山　直美		
論文題目	The practice and evaluation of an educational program on the promotion of Japanese fathers' involvement in child rearing （日本の父親の育児参加を促す教育プログラムの実践と評価） （外国語の場合は，その和訳を併記すること。）		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	主　査	教授	松尾　博哉
	副　査	教授	松田　宣子
	副　査		印
	副　査		印

要　旨

父親を主体とした育児の世話技術を系統的に組み入れた教育プログラムの開発を行い、参加型の育児セミナーの中で教育プログラムを実施するとともに、開始前後でその評価を行った。未就学児の父親で教育プログラムに参加した父親 19 人と質問紙調査に参加した父親 16 人の合計 35 人を対象とした。教育プログラムは父親の育児を助けるような育児技術を組み入れ、育児に対する意識と行動の変化を目標に設定した。調査内容は基本属性、育児への参加意識、育児に関する夫婦間での話し合い、父親同士の友人の有無、育児分担、育児の自立、使用した尺度は、ストレス測定、父親になることによる発達である。父親の育児に関する意識や行動の変化として、ストレス低下、父親の成長、父親の育児分担増加、育児の自立が観察された。本研究では、育児の世話技術を系統的に組み入れた教育プログラムの開発を行った。その教育プログラムを参加型の育児セミナーで実施することにより、ストレスの緩和、父親になることによる発達、父親の育児分担割合の増加、父親の育児技術の自立が促された。このことから、本研究で開発した教育プログラムは父親の育児参加を高める可能性が示唆された。本研究は、父親の育児参加を促す教育プログラムの開発とその有効性を示す貴重な知見である。よって学位申請者の上山　直美は博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。

掲載論文名・著者名・掲載（予定）誌名・巻（号），頁，発行（予定）年を記入してください。

The practice and evaluation of an educational program on the promotion of Japanese fathers' involvement in child rearing.

Naomi Ueyama, Hiroya Matsuo, Bulletin of Health Sciences Kobe, 29, 2014, in press